

近年、博物館・美術館でも積極的にユニバーサルデザインをとり入れていくこととする動きが見られる。一方で、多くの課題があることにも目を背けることはできない。本コーナー最終回にあたり、博物館が目指す未来について、ユニバーサル・ミュージアムという視点から考えてみたい。

感覚の多様性が尊重される博物館

ユニバーサル・ミュージアム(以下、UMと略記)とは、「誰もが楽しめる博物館」を意味する。単なるバリアフリー、障害者対応というレベルを脱して、あらゆる普遍性を模索するのがUM運動の要諦である。一九九〇年代以降、日本においてユニバーサルデザインの考え方が各方面で導入されるようになった。ユニ

バーサルデザインの博物館という含意でUMが注目され始めるのは、二世紀に入ってからである。

最近、僕はUMを定義する表現として、「感覚の多様性が尊重される五月蠅い博物館」を用いている。古今東西、博物館の展示は見ること、見せることを前提として構成されてきた。ミュージアムとは、視覚優位の近代文明の家徴ともいえる。視覚



2015年に民博で開催されたUMシンポジウムのチラシ。表面には点字も印刷されている

中心の展示方法、教育プログラムのあり方を問い直し、さまざまな感覚を活用できる博物館を創ろう。そして、博物館から社会を変えていこう。UM運動は、近代に対する強烈な異議申し立てを内包している。

従来、博物館・美術館は静かに見学する場所と

誰もが働きやすい博物館

これまでに民博では、UMをテーマとする公開シンポジウムを三回実施してきた。また、二〇二二年には本館展示の全面改修の一環でインフォメーション・ゾーンに「世界をさわる」コーナーも開設された。このコーナーは、民博のUM研究の拠点と位置づけることができる。UMが日本の博物館を改変する起爆剤となっているのは間違いない。今後は日本発の新概念として、UMを国際的に普及するのが大きな目標となるだろう。そのUM運動のなかで、喫緊の課題となっているのが雇用・就労問題である。

「視覚障害学生の博物館実習を受け入れてくれる施設がない」「弱視者の博物館実習を拒否するのは障害者差別ではないか」。僕のところにもういった相談が二件、二〇一八年度中にもち込まれた。現在、障害のある学生が学芸員資格を取得することは制度的に認められている。だが、繊細な資料の取り扱い、照明器具の微妙な調整などの実習では、視覚障害者には「できない」ことが多い。二〇一六年施行の障害者差別解消法では、「できない」を解消するのが合理的配慮とされているが、何が合理的で、どこまで配慮すればいいのかわからない。曖昧である。例えば、視覚障害学生

のために補助員を提供するとしても、その補助の内容は慎重に考える必要があるし、専門的な知識・技術をもつスタッフの養成は簡単ではない。

僕の知人の全盲者は、学生時代、ある博物館で実習を経験した。実習を通じて彼は、博物館の業務遂行上、視覚が必須であることを感じ、学芸員になる夢をあきらめた。あれから二〇年ほどが過ぎたが、基本的に状況は今日も同じである。ちなみに、彼は今、高



筆者は2014年度から東海大学の博物館実習を担当している。実習では、学芸員の資格取得をめざす学生たちに触覚と聴覚による情報収集・伝達の可能性を実験してもらった。民族楽器や仮面に直接触れて触覚や形状を確かめる実習は、全盲の講師ならではの試みといえよう(2019年撮影)



民博の「世界をさわる」コーナー。さまざまな地域、素材の民族資料に優しく、ゆっくりさわること、来場者は「触文化」の豊かさを体感できる

校の英語教員となつて活躍している。

さまざまな障害者が学芸員として採用されることにより、博物館そのものが変化する。これは、障害当事者として博物館に勤務する僕の信念である。学芸員実習も柔軟に運用され、万人に開かれるべきだろう。しかし、多くの博物館では「雑芸員」と揶揄される少数の学芸員が日々の雑務をこなしながら、展示や教育プログラムを企画・担当しているのが現実である。そういった館が、配慮を要する実習生を受け入れるのは厳しい。日本の博物館で障害者が学芸員採用される例はきわめて少なく、おそらく視覚障害者の学芸員は皆無だろう。

お互いが「できる」ことを分担するのが障害者雇用を進める鉄則である。とはいえ、昨年発覚した省庁等の公的機関における障害者雇用増し問題を想起するまでもなく、「障害者にもできること」を見つめるのみでは現状打破は難しい。障害者雇用の進展を図るには、「障害者だからこそのできること」を探究する発想が不可欠だろう。

感覚の多様性が尊重される五月蠅い博物館。この理想が雇用・就労という面で博物館に根付くまでに時間がかかるのは確かである。だが、「障害」という観点で学芸員の仕事を再解釈再検討することは大切だろう。UMとは「誰もが働きやすい博物館」である。そう言える口がきつとやってくる僕は信じている。